

美術館を再開します

「ほっこりしたいから、息抜きに大阪まで出かけて美術館に行った」。

これは今から 25 年前、阪神・淡路大震災が発生してから、しばらくしての春先三月ごろ、読売新聞大阪版に載っていた、神戸在住の女性が寄せた投書の一節です。

当時、私は阪神間のある美術館に勤務していたのですが、街全体が惨状をきわめるなか、美術館は避難所として使われ、被災された方々のお世話と再開に向けて黙々と仕事をした記憶があります。先の見えない、それこそ息の詰まるような日常のなかで、この投書を読んだとき、「ああ、そうか、それでも待っていてくれる人がいるのだ」と意を強くしたのです。

今でも、「美術館はだれのためにあるのだろう」と自問自答するとき、彼女が書いた、この一節をときどき思い出します。問題の提起や解決に向けた、なにかヒントのようなものがあるような気がしてならないのです。

大阪市立美術館は、4 月 11 日から『300 年の愛が華開く フランス絵画の精華 一大様式の形成と変容』と題した、フランス・ロココ美術の変遷とその影響をたどる展覧会を準備していたのですが、誰もが予想もしなかった、コロナウイルスの世界的蔓延のなか、緊急事態宣言が発令されて、ルーブルやオルセー、大英博など世界の名だたる美術館から集められた作品は、展示はされたものの、展覧会自体はそのまま休止となっていました。あのマリー・アントワネットやブルボン王朝の華やかな宮廷生活をしのばせる珠玉の作品群は、美術館の展示室で壁に掛けられたまま、ひっそりと「出番」を待っていました。私自身も、点検のためときどき展示室に足を運んでいるのですが、きわめて慎重に選ばれて、かつクオリティの高い、また教育的意義も深い作品の数々を眺めていると、「早くコロナの災禍が終息してほしい、たくさんの人に見てほしい」との思いはつのるばかりでした。

幸いにも終息の兆しが見え始めたようで、宣言の解除と緩和を受けて、美術館は 5 月 26 日から再開します。

美術館は日常から少し離れた祝祭空間です。特別な時間と空間を満喫し、それこそ「ほっこり」して気持ちをリフレッシュさせてくれます。とはいえ、「新しい生活様式の提案」にあるように、いまだウイルス再流行の懸念が払拭されないなか、誠に申し訳ないのですが、しばらくは、これまでとはちがった美術鑑賞のありかたをお願いすることになります。カタストロフィー、つまり破局的状況の色合いが薄まれば薄まるほど、かつてのゆとりある日常生活がゆっくりと戻ってきます。

地域や歴史を問わず、どんな困難な時期にあっても、美術館や博物館、つまりミュージアムは変わらぬ姿で立ち続ける使命があります。美術館はすぐれた美術品を公開するだけではなく、それを見たみんなの記憶を保存する装置なのです。

コロナ災禍の困難なこの時期、力を合わせて乗りきるためにがんばりましょう。少し疲れたら、どうぞ美術館まで足をお運びください、そして少しだけ、「ほっこり」してください。300年の華やかな愛をまとった、珠玉の作品があなたをお待ちしています。

美術館は、5月26日から再開します。

大阪市立美術館 館長 篠 雅廣